

哲學研究

第六十三號

第六卷

道德の特質に就て

西 晋 一 郎

一

倫理の特色を學的に明にするには哲學體系の成るを要する。これは文化生活が統一を得る即ち眞文化を成すを得るには體系的哲學の成るを要する意味である。さなくば假令科學、經濟等發達しても文化的統一を得ず、従て倫理の眞地位も明とならぬ。

倫理の特質は一面自然一面他の文化方面(藝術宗教學問)との關係差別を明にして知るべきであるが、文化の他方面との差別往々分明し難いばかりでなく自然との相違すら見難いと思えてカントの如き嚴密に此點を論じて倫理の基礎を立てんとし

たに拘はらず今日尙ほ自然主義が尤もらしく唱へられて居る。それには譯のあることであるやうに思はれる。

プラト一の徳の論の中には人畜に共通とも見るべき働きをも徳としてをる。これは自然的徳と稱してよいものである。次には習慣的徳とも謂ふべきもので兒童畜類にも見る所のもの、麤の類である。次に政治的徳と稱すべきものに至つて始て文化を發するので、理性が主動的となつて來る。

されど此等が等しく徳と稱せらるるは偶然にあらざる所がある。自然も其が認識の現象として在る限り意識に本づくことは近代哲學の説の通りである。とせば意識を本とするに於ては文化と同様である。而して意識の根本的性質は意志である。とせば意志を其特有領域とする道德は自然文化に通じて一切存在の根本形式であり、一切生活即徳といふ意味がある。自然と道德とは根本に於て同じい。一切は徳の種々の段階に於ける現はれであることになる。此所に倫理上の自然主義も根據がある。

自然も自然である限り無形相の物質でない。形相ある限り意識の働きを示してをる。存在とは形相の出現のことであつて、形相は意識を示す。識るとは形相の現

はるることである。形相無き所に識るべきなく、識る無き所に形相あること無し。

識るとは鏡である、あるがままに見るのである。主客の一致である。意識は正直そのものである。存在の根本形式は直である、内外無齟齬である。故に又意識は本來運動である、實行、直行である。此根本的性質の十分なる發展は社會的信であつて、ここに至つて分明に道德を現はす。然れども此社會的信即政治的德を完全に成すに必要なものがある。政治的德は諸方面に發展せる意識内容の統一であつて理想國組織として現はれ、始めて文化を呈する。此文化の眞の基礎がプラトリーのフェドンに説いてある哲學であり、德としては淨化的德である。哲學と淨化的德とは相表裏する。哲學は死の道であり、哲學的思惟は欲求から脱退するによつて行はれる。諸種の學は進歩の學であるが眞正の哲學は退歩の學であつて、これと共に世間的倫理は出世間的に轉ずる觀がある。然かもこれ二様の道德を説いたのではない。諸種の智識が自己の據つて立つ本に反省する、智識が退いて自己を反省する、認識論は哲學の入門で意識の本を尋ねる、ここに其本を把握して始めて眞の統一力を得て、一切諸の智識は有機的體系に組織せられ、一切世間の生活が眞に生きて來る。かくて出世間的に却て世間的の本をなし、哲學と淨化は相伴ひて文化の基をなす。諸種の智識

は欲求の發展と相表裏し、人生の内容を成してゆくのであるが、哲學は退いて自己を求め、欲求に克つことと相伴ふ。

プラトニーを遙に繼げるプロチノスは此淨化を大に説き、これによらねば何れの徳も完からずとなし、世間の徳、政治的徳が其模範たるイデア界の徳に反へる道であるとしてをる。模範的徳とは人間の徳以前のもの、其範たるもので、如何なる徳かといふに全く意識の極致に外ならぬと思はれる。かくて徳は意識の最も初歩なる現はれである自然より意識の極致たる模範的徳に至るまで意識を以て終始する。模範的徳の中智とは智的直觀に於て己自身を見ること、見ること即在ることなり、正義とは自己に特有なる働きをなすこと、即ち此場合部分々に分れたる一と他との關係でなく、一が己自身に對して働くこと、つまり一層智的に作用することとなり、節制とは外に求めざること、理性が内に向ふこととなり、勇とは非物質的、非感性的なること、理性が己に純なることなりと言つてをる。これ皆意識究竟の相をいろいろに見たので必ずしも別々の働きではない、而して淨化に由つて達する境である。

然らば此模範的徳が終極であるか、眞に自らで存し獨り立つものであるか。既にイデアといひ、範(バラディグマ)といふ以上これ多であるから獨立自存であり得ない。多は一によつてのみ存立する。この「一」がプラトーンでは善のイデアであつて、イデア界の統一、一切實在の支持的原理である。併し「善」といふ名に拘はつて之をプロチノスの原本的徳(模範的徳)と同一視せばイデアと同列に隨する、イデア界の統一者としての意味を失ふ。プラトーン自身之をイデアと言ひながら、而してイデアとは物の本質、眞實在なりとしながら、之を超本質、超實在、超眞理と言つてをる。蓋しかくてこそイデア界の多を統一するを得る。されど此旨を詳らかにしたのはプロチノスであつて、即ち之を「善」「一」と名づけ、實在、眞理を超越せるもの、プラトーンの善のイデアとは是なりとしてをる。

眞實在をイデアと言ふ所以は蓋しイデアでなければ「在り」としやうがない。智的に見るは即ち在ることであつて、見と在は同一境であるとしても、矢張り兩面あることを全然脱しはせぬ。イデア即ち見えなくしては在りとしやうもない。又イデアを原型 *Urbild* としても觀することなければ範とすべき由もない。故にすべて實在する以上何等かの意味でイデアでなければならぬ。これ意識の根本形式たる明の

ことである。されば見即在のイデア界も見と在の兩面を全然脱せざる以上此兩面を眞に一にする「一」なかるべからず、此「一」なければイデアも亦イデアたり得ぬのである。

又既に見といひ在といふ、これ多であつて、從て之を多ならしめる一がなければならぬ。此「一」は多である所の見を超えて超眞理であり、在を超えて超在である。在りとなすは在らざる所からうち出でてのことである、これ在らざるに依る在である。自らで存し常に在るもの何ぞ在りとせむ。これが善なりと固く執るとき善ならざるものが隠見してをる、常に善であれば善といふこともない。プロチノスは故に「善」と言つてをりながら又之を超善と言つてをる。之を「善」と言ふは自ら善となすのではなく、一切の歸趣であつて一切が之を求むる故、一切から見て善なるのである。居るものは必ず去る期があり、執るものは必ず離れる時が来る。只善に居らざるもの善を去らぬ(老子)。

故に善惡を超ゆるが善の據つて立つ所なりとは必然の論理である。而してここに宗教の天地が開けて來ることと思ふ。低い宗教も高い宗教も、高い宗教の種々も皆其源を此所に發するのではなからうか。若し善のイデアを倫理的の神の如くに

見れば道德の完成の外に宗教の眞意義なからむ。かく考ふる説もある。併しこれでは道德外に特に宗教といふものが人生に意義あることを辨明したとは思はれぬ。此點を今少しく考へて見たい。

三

道德も完成せば宗教であり宗教も其最も發達せるは倫理的宗教であつて善を其内容とすとせば此一致點に到らぬまでは宗教は眞の宗教でない。宗教の正體は倫理の完全に於て見出すとせば、それまでの宗教とは神話又は迷信の如きものであるであらうか。然るに宗教にあつては高尚なる宗教とせられてをるものに於ても必ずしも道德と其内容を全然一にするものでない。たとへばクリストを信ずるによりて救はれるのは只此信によりて然るので、道德を實行した力によるのではないとせられてをる。反之神を只善の範イデオと見る物は道德の實現は人間自身の努力に依るので、神が直接に人に働いて來るのではないと見る。道德の方でいふ個性は生活の全體的統一に於て無限の關係の上に成るもので、此意味に於て無限性を有つと見るべきであるが宗教に於ては個人とは必ずしも斯くの如くではない。其譯は夫の「一

は只第一次的に實在するもののみならず又苟も實在するものの本であり、全體に於ても部分に於ても、一切に於ても一々に於ても、一を得ることが出来る。感覺も此により、思惟もこれによる。衝動もこれにより、意志もこれによる。本と然かるが故に感覺は思惟に衝動は意志に統一せられ得るのである。こゝは他との關係即ち相對を絶つ故、即ち「一」なる故、意識内容一々自主にして唯純なるものである。邪念とか貪欲とかいふは關係上言ふことで、貪欲も「一」によつてあること善良なる意志の然るが如くである。之を得るときは故に貪なりとて必ずしも棄てず、善意なりとて必ずしも固執せざる境がある。又そうであるから欲望も統一せられては理性的意志の内容たるを得る。善惡美醜いづれに轉んでも外づれることのなきものとす。倫理は意識の道、存在の道、生の道、最大多數の幸福の道である。宗教は意識を忘れ、生死に通ずとなす。倫理は人生を統一建設するものであるが、宗教は建設破壊不二と見て、そこに倒さんとして倒れざる不壞の建設力ありとするのである。

然かも二者は必ずしも相悖る性質のものでなく、實に深く一である。超善とは偏善のことであるからここに善は磐石の基礎を得るのであらうが、又意識の如何なる内容も直ちに純粹なるものあるが故統一せられては意志界即ち善の國を築くこと

が出来るのである。

宗教は一一に即いて「一」を得るから其内容は個個特殊であつて、教化の程度によつて高下の別あらむが、只其形式に於ては絶對を得ることが出来る。一切に即いての「二」にして始て内容の全體と形式の絶對と一致する、これ蓋し造物主に於て見る所であらう。倫理は内容を統一してゆくもの、意志は無限の關係の上に實現せられてゆくものであつて、これ人格の世界、即ち對人格の世界である。人格的とは倫理的即ち人間的といふことである。宗教は一々の中心即ち自主が一切の中心即ち自主と形式上合一するにある。倫理は造化の内容を所與として之を意志的に統一する所に自己を實現せんとする。これ倫理が一面努力的であつて、一面最具體的統一たる所以である。自然即ち所與を素とする所に倫理の特質を見る。知能を啓發し人生を組織する上に自由を實現せんとする。宗教に於ては主觀的には自由の天地に翔つても實地に現はし得る所は其才量學識の範圍外に出づることが出来ない。徳は只修養實行によつて養はれる。されど一切内容の根原と形式上合一する故これから發して生活を合理的に發展せしめることが出来る。是れ信仰後の修業を説く所以である。救はれても直ぐに善人ではない。

意志は與へられた自然を統一して達する自由であつて只形式上の自由ではない。之を藝術と比較するに、藝術は自然界の裡にあつて然かも別天地を創造する。内容形式を具するが、其内容は藝術家の創造であつて、内容創造の上に藝術家は自由を實現する。藝術家が最適當なる意味に於て天才、小造物主である。道德の内容の素地は之に反して大自然の創造にかかる。吾人は男女の本能を作る力は有たぬ、只此所與の本能を素として夫婦の道を實現する所に吾人の道德的自由が實現せられる。宗教は又現實界(意識内容)の如何なる點に於ても到る所同じ自主獨立の境地を見出すのであるが、道德は現實界の内容の統一を期し、人格界、精神國を建てんとする。草木は禽獸のために禽獸は又草木と共に、人のために、人は相互のためにありとし、此相互のために生きる所に始て眞正の精神を現んじて目的國を立てる。このとき自然界は精神界の方便である。又此目的國の王を愛と正義の神と見るとき倫理的宗教が成る。

道德は自然を素とする故最具體的であつて、深く人人の天賦、種族、民族の氣質、國土、山川の情勢に根ざし、國家の組織の上に實現せられ、世界史進行の中心點となる。道德は文化としては人人相互に盡す所に實にせられるのであるが、本來意識と終始す

るもの、意識の根本的性質である故此文化的生活、道德界は只自然界の上へのみ實現せられる。道德がかく自然的必然の上に成る自由であるに比べては宗教は其自然との關係が偶然的である。他の國土他の民族から傳つた宗教を奉ずることが出来る。但しかかる場合には民族的國家とかかる宗教(特に其教會組織)との間には往々葛藤を生ずる。民族傳來の宗教と國民道德とが最もよく堅固な統一をなす(完)。